地論師の『十地経論』注釈について

山口 弘 江

一 はじめに

中国の南北朝時代から隋代にかけて、北地では『十地経論』の翻訳に端を発して独自の教学を發展させた地論師たち⁽¹⁾が多いに活躍した。その代表格として知られる淨影寺慧遠(五二三―五九二)は多くの著作を残し、うち真偽未決のものも含めると一二もの文献が現存するが、慧遠以外の地論師の著作は早くに散逸したため、一次資料を欠いた彼らの思想の詳細を把握することは、かつては困難であった。しかし、近年、慧遠以外の地論師の思想を伝える文献が敦煌写本の中などに複数残されていることが判明し、これらに対する研究が進められたこと⁽²⁾で、慧遠とは異なる地論教学の断片が今日徐々に明らかとなりつつある。

さて、地論師と称された彼らの教学が「地論」つまり『十地経論』の思想と密接な関係にあるであろうことは、一部の先学によって指摘されていたところのものである⁽³⁾。しかし、

現存する資料のうち『十地経論』注釈には完本がないという制約もあり、これまでの地論教学に対する研究では、『十地経論』注釈に対する総体的な検討がほとんどなされてこなかったのが実状といえよう。

本稿はその試みとして、すでに研究が進みつつある敦煌写本の『十地経論』関係の諸注釈を中心に考察を加え、これらの文献間に見られる特徴的な共通点及び相違点を指摘することで、各文献の成立の検討に資することを目的とするものである。

二 現存する『十地経論』注釈の全体像

周知のごとく、『十地経論』は『華嚴経』十地品の経文に對する注釈書である。そこで、注釈者である世親による部分は「論曰」、経文は「経曰」と始めることで、経文と注釈を明確に区別する。この『十地経論』に対する注釈は、中国のみならず仏教史全体の中でもそれほど多く撰述されたわけは

ない。⁽⁴⁾ところが、矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』では「十地疏」という項目が立てられ、敦煌写本には十地に関連する内容の残巻が少なくないことが指摘された。これらがみな地論師に関連する文献であることから知られるように、他師に比べて地論師が『十地経論』に寄せた関心は大きいものであったことは明らかである。

管見の限り、今日その存在が知られ、かつ我々が参照しうる地論師の『十地経論』の注釈には以下のものがある。

まず、続蔵所収の慧遠『十地経論義記』四巻(以下、慧遠『義記』)は、日本に残された写本に基づき刊行された版本を底本として収録されたものである。全七巻のうちの前四巻が現存し、『十地経論』の初地から三地までの釈を残している。完本ではないものの、現存する地論師の『十地経論』注釈書の中では最もまとまった分量を有する文献である。

次いで大正蔵八五巻古逸部には、撰者不詳『十地義記』(以下、『義記』)と法上述『十地論義疏』巻一(以下、『義疏』巻一)および同巻三(以下、『義疏』巻三)の三写本が収録された。

このうちP.2048を底本とする『義記』は、首欠ながら初地を序分の冒頭一部を注釈し、題記を付して終わる文献である。引用される『十地経』の本文が『華嚴経』十地品のものではなく、『十地経論』で「経曰」として掲げられるもの⁽⁵⁾と一致することから、『十地経論』を参照して撰述されたこと

は明らかであるが、「論曰」の部分に対する注釈はないことが指摘されるように⁽⁶⁾、十地品の解釈を主とした内容であることが特徴である。

次に、S.2741(一部S.2717)を底本とする『義疏』巻一は首尾ともに欠き、初地序分の終わりに近いあたりから請分の初めまでを注釈する。それに対し、P.2104を底本とする『義疏』巻三は、首欠で初地校量勝分の途中からはじまり、二地の最後までを注釈した上、題記もある。これらはいずれも慧遠の師ともされる法上(四九五〜五八〇)のもの⁽⁷⁾と見なされ、七識を阿梨耶識と規定する独自の心識論が説示されていることから、早くより研究者の関心を引いている文献である。

この他、近年注目されるものとして、二〇一二年に韓国で出版された『蔵外地論宗文献集成』(以下、『蔵外』)に収録されている撰者不詳『大乘五門十地実相論』巻六(以下、『実相論』)と、近刊の『蔵外』続編に収録予定の撰者不詳『十地経論疏(擬題)』(以下、『論疏』)がある⁽⁸⁾。

BD03443を底本とする『実相論』は、首欠で八地の途中から法雲地の末までを注釈する文献である。一方、BD06378(一部S.3924)は、首尾ともに欠き、初地請分の途中から続く説分の途中までを注釈する。

『義記』以下、敦煌写本の諸文献はいずれも断簡であり、注釈対象となる範囲に連結する部分はない。ただし、これら

はいずれも地論教学の特質を示す用語が確認されることから、地論師の文献として認定されている。⁽⁹⁾

また周叔迦、荒牧典俊、青木隆などの諸先学は、『義疏』卷一・『義疏』卷三・『実相論』の三文献には、五門（仏性門・衆生門・修道門・諸諦門・融門）という概念を基調とする共通点が見られることから、これらが成立において密接な関連性を持っていることを指摘する。⁽¹⁰⁾ さらに『論疏』についても、青木隆は五門関連の文献には加えていないものの、これを同時期に成立した文献として位置づける点が注目される。⁽¹¹⁾ ここで、以下に五門関連の文献と『論疏』の関係を中心に検討を加えてゆくこととする。

三 『十地経論』諸注釈の関連性について

(一) 釈風について

『論疏』は説分の冒頭部分の釈が含まれている。したがって、もしこれが『義疏』などのように五門に基づき解釈された文献であるならば、説分と仏性門の関係を示唆する文言が加えられたはずであるが、それが見られないため決定的な証拠に欠く。⁽¹²⁾ ただ、そのような点を差し引いても、五門関連の文献と『論疏』の四文献には一見にして明らかな共通する特徴が認められる。それは極めて簡素な注釈方法である。慧遠『義記』は科段を立て文脈を構造的に把握することで釈を進

めているが、四文献にはこのような意識はほとんど皆無で、『十地経論』の「論曰」にあたる部分を中心に文言を抽出し、逐語的に解釈を手短に加えるというのが釈風の基調である。このことは注釈対象である『十地経論』の論の部分自体が、すでに経の注釈であるということが背景にあるものと考えられる。

また、そのような簡素な注釈の間に、「問曰」「答曰」という問答をはさんで、部分的に議論を深めているところも四文献は全く同じである。

ただし、『実相論』は『十地経論』が经文から論文へ、または論文から続く经文を飛ばして次の論文へと段落が改まる釈に入ることにより、『十地経論』のように「論曰」という語を補っているため、構成に忠実で論との対応が非常に分かりやすいという特徴がある。それに対して、他の三文献にはこのような配慮はほとんど見られない。よって、『実相論』からは形式の面よりみて、他に比べて整備されたものとの印象が強く感じられるという違いがある。

(二) 注釈内容について

先にも言及したように、四文献には重複する部分がないため、直接的に内容を対照することは不可能である。しかし、注釈の過程において、前後の经文を引用する部分があることから、これらを丹念に抽出し比較検討することで、注釈内容

の相違の有無はある程度確認できるものと考えられる。実際、『論疏』には『義疏』の解釈と関連性を窺わせる表現が見られる。以下に、その具体的な例を挙げてゆきたい。

まず『論疏』には、次のような問答がある。

問曰。何故盧舎那仏、前唯意加、無身口加也。答曰。前入三昧、彰自体因、故因得果力。
（四四～四五行）

ここでは、盧舎那仏が意加だけで身加と口加がないのはなぜかという問いに対し、答えの冒頭で「前の三昧に入るところでは」と『論疏』が『十地経論』の先行する部分に言及するのであるが、それに呼応するかのごとく、類似の解釈が『義疏』巻一に見られることが注目される。

下論云。金剛藏得大乘光明三昧者、是其法体自体因、因不異果。以果嚴因得力義顯。
（大正蔵八五卷七六四頁中～下）

これによつて『論疏』にいう「前の三昧」が『義疏』巻一で解釈されるところの金剛藏菩薩の大乘光明三昧を意味していることが明らかとなる。

また、『論疏』において、この直後に用いる表現も興味深い。

「不軽自身」者、為顯勝力方便身。即是報身。故自体不動、而無所不至也。
（五八～五九行）

ここでいう「自体不動」と「無所不至」は、『義疏』巻一にも全く同じ文言が見られる。

「示神通力」者、自体不動、無所不至。

（大正蔵八五卷七六五頁上）

「無所不至」は『十地経論』の冒頭に見られる言葉であるが、⁽¹³⁾「自体不動」とともに用いられるのは管見の限り『義疏』と『論疏』だけのようである。両文献ではともに、本体が不動でありながらも、あらゆるところにまでその働きが及んでいる、融通無礙なさまを表現した語としてこれが用いられたと考えられよう。

（三）共通する用語について

四文献は、他の経論の引用が多くないことも共通する特徴の一つである。そんな中、『義疏』巻一・『実相論』では、求那跋陀羅訳の四卷本『楞伽経』の偈文を取意的に引用したと思われる文言が、全く一致している点が注目される。⁽¹⁴⁾これは他の文献では見られないものである。『義疏』の心識説については、七識を阿梨耶識と位置付ける点が特徴であることから諸研究において注目されているが、⁽¹⁵⁾その議論の中に引用される『楞伽経』の偈文が、『実相論』にも全く同じ文言で引用されているのである。これとは対照的に、慧遠『大乘義章』八識義（大正蔵四十四卷五三〇頁上）は、四卷『楞伽経』と一字も違わずに引用しているため、この一致は五門関連の文献における思想的な系統を考える上で重要な要素であると言えよう。⁽¹⁶⁾

また、『論疏』には、特徴的な表現として「外用」「殊能」が散見され、これを連用した「外用殊能」が三か所(二六八・三七三・四一三行)で確認されるが、『義疏』巻一に「一か所(大正蔵八五巻七六六頁上)同じく見られるほか、同様の一致(同七七七頁下)があるのが、五門関連の文献と目される『瓔珞經疏』(S.2748)である。そこにはこの他に、このような表現の淵源とも思われる解釈が示されている。

大用無方者、真実妙徳、用周法界、殊能之謂也。(同七四五頁下)ここにいう「大用無方」とは、『菩薩瓔珞本業經』を典拠とし、地論教学における重要な概念の一つである縁集説と関連して用いられることで注目される語である。⁽¹⁷⁾このように『十地經論』注釈以外の五門文献との間に特異な用語の共通依用が見られることは、間接的に『論疏』と他の五門文献との関連を窺わせるものと言えよう。

四 おわりに

以上の考察から、これまで指摘されてきたように『十地經論』の諸注釈、特に本稿で取り上げた敦煌写本の四文献については、同一の撰者とまでは決め難いものの、極めて近い教養や知識をもった人々の中で編纂された文献と判断してよいものであることが改めて確認されたかと思う。ただし、『実相論』が整備された形式であることを考慮すると、これらに

は基盤となる注釈の成果があり、それが弟子たちの間で受け継がれ内容が整えられていった過程があったと考えるべきであろう。その基盤となる注釈が『義疏』巻三にその名が見える法上であるのか、さらに遡ることができるとかについては、今後より広範な資料を対象とした調査が必要となるため、今後の課題としたい。

1 地論師という呼称については、吉津宜英「地論師という呼称について」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』三十一号、一九七三年)、池田将則「教理集成文献(S.4303)解題」(『蔵外地論宗文献集成』、韓国CIR、二〇一二年)二〇七頁を参照。なおこれに関連して、今日学界において用いられる「地論宗」「地論学派」などの総称は、その適用について異論も少なくない。筆者も積極的にこれらを用いる確固たる方針を持ち合わせていないため、自称であるかの是非はさておき、本稿では歴史的に文献の中で用例の見られる「地論師」を用いることとした。

2 地論宗研究の動向については、石井公成「地論宗研究の現状と課題」(金剛大学校仏教文化研究所編『地論思想の形成と変容』、国書刊行会、二〇一〇年)に詳しい。また、前掲『蔵外地論宗文献集成』により、写本としてのみ伝存していた地論宗関連の文献が翻刻・訳注の形で公開されるに至っている。

3 矢吹慶輝『鳴沙余韻 解説』(岩波書店、一九三三年)一〇一―一六頁、横超慧日「北魏仏教の基本的課題」(横超慧日編『北魏仏教の研究』、平楽寺書店、一九七〇年)三五―四五頁、石井公成「敦煌文献中の地論宗諸文献の研究」(『駒澤短期大学仏

- 教論集』一号、一九九五年)九一頁など。
- 4 大竹晋「『十地経論』解題」(『新国訳大蔵経 十地経論I』、大蔵出版、二〇〇五年)三五〜三八頁にはインドおよび漢土における研究史がまとめられている。
- 5 古泉圓順「『自分行』」「『他分行』」(『日本仏教学会編『菩薩観』、平楽寺書店、一九八六年)三三四頁。
- 6 矢吹慶輝前掲書一一頁。
- 7 SUTAIは大正蔵で『義疏』巻一として収録されているが、写本そのものには題記などが何もないため、実際には文献名および巻数、そして撰者について確定しうる情報はないということに留意する必要がある。
- 8 青木隆氏と筆者の共同で、解題・訳注翻刻を掲載する予定である。
- 9 青木隆「付 敦煌出土の地論宗文献解題」(『荒牧典俊編『北朝隋唐仏教思想史』、法蔵館、二〇〇〇年)一九四〜一九九頁、および同「敦煌写本にみる地論教学の形成」(『金剛大学校仏教文化研究所編前掲書』四四頁)。
- 10 先行研究については拙稿「『十地論義疏』と『大乘五門十地実相論』——周叔迦説の検討を中心として——」(『東洋学研究』四八号、東洋大学、二〇一一年)を参照されたい。
- 11 青木隆前掲「敦煌写本にみる地論教学の形成」の「付表一」六三頁。
- 12 詳しくは近刊の『蔵外』続編の解題を参照されたい。
- 13 『十地経論』巻一(大正蔵二六卷一一三頁下)。
- 14 詳しくは前掲拙稿を参照されたい。
- 15 最近では吉村誠「地論学派の心識説と南北二道の形成——法上『十地論義疏』を中心に——」(『印度学仏教学研究』六一—
- 二号、二〇一三年)など。
- 16 この他、同じく五門文献である『大集経』の注釈である『大乘五門実相論』と『義疏』巻一には内容的にかなり一致する一段があることが、石井公成「『大乘五門実相論』について——敦煌写本中の地論宗系『大集経』注釈書——」(『印度学仏教学研究』六〇—一〇号、二〇一一年)に指摘されるほか、『義疏』巻三(大正蔵八五卷七七六頁中二八行〜二九行)の約三五〇字が『瓔珞経疏』(同七五五頁下二行〜二三行)の内容とほぼ一致していることが、藤谷昌紀「敦煌本『本業瓔珞経疏』の引用経典について」(『大谷大学大学院研究紀要』一九号、二〇〇二年)一〇九—一一〇頁に指摘されるなど、近年の研究によって、五門関連の文献の関係を示す根拠が次々と報告されている。
- 17 石井公成前掲論文三六〜三七頁、および青木隆前掲「敦煌写本にみる地論教学の形成」五九頁。
- 付記 本稿脱稿後に、本文中及び註12に言及する「『蔵外』続編」は、『蔵外地論宗文献集成 続集』(韓国 CIR、二〇一三年一月)として刊行された。
- 〈キーワード〉 地論師、『十地論義疏』、『大乘五門十地実相論』、『十地経論疏』
- (駒澤大学専任講師・博士(仏教学))